

「環境と心身の健康」三菱UFJ環境財団寄附講座シンポジウム

鴨下一郎 環境大臣 特別講演要旨 ( 11月11日(日)午後 )

私たちは、ストレスから様々な病気になります。

そのストレスは、人類が誕生し文明が生まれる頃は、現在と比べて大きく違っていました。

その頃の恐怖の一つは闇でした。夜に動物に襲われる恐怖、また、これに、いつ食事が取れるかわからない、という飢えの恐怖も加えることができます。つまり、自然環境そのものが恐怖であり、ストレスの原因だったのです。

人類は、これらの恐怖をひとつずつ克服していくこと、例えば、火を使い、水を治め、飢えを克服し、さらに積極的に自然に働きかけていくことで、徐々に文化的になり、科学を発展させてきたのです。産業革命を契機に蒸気機関を発明し、それが電気の利用につながり、自動車の量産をはじめとする大量生産・大量消費にまでつながってきました。しかし、その頃、地球温暖化問題などはゆめゆめ考えられていませんでした。自然環境は、フロンティア精神で挑戦する対象であり、人々は、自然の恐怖を克服することは正義であるとして、科学・文明に対する自信と万能感を得ていたのです。

しかし、第2次世界大戦が終わった頃から、新しい地球規模の問題が生じ始めてきました。それまで、自然環境・地球によって生活を左右される受身の存在であった人類が、地球の環境を変えてしまう主体的な存在に変わってきたのです。さらに、最近になって、宇宙から地球を客観視できるようになり、

自然は有限であるということもわかってきました。そして、私たちの一つ一つは小さな行為でも、その積み重ねが地球に影響を与えているという理解も共有されるようになってきたのだと思います。火をたき、食事を取り、電気を使うという自己の健康や幸せにつながる一人ひとりの行為の総和が、問題を起こし始めていることに気づき始めたのです。

今年のノーベル平和賞は、地球温暖化問題について啓発活動を行っているアル・ゴアと、その問題を最新の科学的知見で捉え世界的な合意をまとめた科学者集団であるIPCCが受賞しました。IPCCによって、ようやく、この温暖化の原因が、人為的な行為によるものであるという結論が出たのです。この受賞は、地球温暖化問題が拡大していくと、いつかは食料などの欠乏、奪い合い、経済的混乱、そして戦争まで生じるかもしれない、それをどうやって食い止めるかという活動が、まさに平和に対する活動だと評価されての受賞、ということに注目する必要があります。

地球をひとつの生命体とみなすガイア仮説を提唱したラブロックは、人類の火の使用が問題の始まりで、それが温暖化の問題を生み出したと指摘します。火を使い、電気を使うことで豊かな生活を享受する私たちは、その生活すべてを否定することはできません。石炭・石油などを含む自然からの収奪によって支えられていることを忘れてはいけません。そうした前提で、この問題に取り組まなければならないという難しさがあります。

地球温暖化を防止するための国際的なルールである京都議定書は、今から10年前に成立しました。しかし、最大の排出国である米国は参加せず、大

量の温室効果ガスを排出する中国・インド等の途上国の行動も制限されていません。また、この枠組みに参加している日本も、来年から5年間で、排出量を6%削減しなければなりません。現状では逆に排出量は8%上昇しているという状況です。

このため、国内では、様々な取組を始めています。工場や事業場での自主的な削減や、様々な製品のエネルギー効率の改善などはもちろん、最近では、1人1日1kg削減という個人のチャレンジプログラムも開始しました。今、私たちは一人当たり1日6kg、サッカーボールで約600個分の二酸化炭素を排出している計算になりますが、これを、せめて1kg減らそうというものです。しかし、まだまだ対策は不足しており、環境省では、環境税や排出量取引といった新しい経済的な手法も含め、様々な対策を検討し、提案していくこととしています。

また、国内対策だけでなく、地球レベルでの対策も不可欠です。それが、現在、国際交渉が進められている京都議定書の後の枠組み作りです。

私も、その交渉のため、インドネシアのボゴールに行き、2009年までに、すべての国が参加した枠組みを作ろうという提案をしました。その際にも、例えば、途上国からは、今まで大量に二酸化炭素を排出してきた先進国が、今更全員で削減なんて言い出すのは勝手だ、との意見が出されたりしました。合意に至るまでには、まだまだ粘り強い交渉が必要です。

しかし、話し合いがまとまらず、いたずらに時間が過ぎていけば、破滅的な状況が待っています。また、世界が取り組み始めた対策の中にも、例えば、穀物価格の上昇をもたらしたバイオエタノールガソリンなど、自己矛盾

を抱えた課題も少なくありません。こうした状況の中、先進国と途上国のみんなが参加したルール、枠組みを作らないといけないわけです。私としても、目的の達成のため、最大限の努力をしようと考えています。

これまで、私たちは、自分自身の健康のことを考え、生活水準の向上に努めてきました。しかし、現代は、必ずしもそうしたことが許されない時代です。つまり、暖かいものを着て、おいしいものをたくさん食べるという行動が、巡り巡って地球温暖化という新たなストレスとなって私たちに降りかかり、将来、私たちの健康を害しているかもしれないという時代になったのです。

日本国内の対策を見ても、国際的な交渉を見ても、結局は、今、私たちの足元にある豊かさを少しだけ削って将来のために取り組む、その難しさが根底にあります。しかし、自分たちだけ現在だけが良ければいいんだ、という時代は、もう終わりにしなければと思います。

そして、世界も、京都議定書以来、この問題を克服するために集まって、理性的に解決方法を話し合うという、もしかしたら人類の歴史上初めての取組に着手しているのです。

私たちは、こういう時代に生きている、その点を噛み締め、一人ひとりが自分でもできること、気づいたことを行動に移すことが求められていると思います。

( 了 )